読売新聞

2006年2月9日

伝え合う力 深める

子供たちが企画運営し、説明する力を付ける体験学習がある。

教育ルネサンス No.256

3

企画運営 自分の言葉で

5人のスタッフが、ロボットの動かし方を小学生に教えていた。簡単なプログラミングと数台分のコンピューターで作れるロボットだ。そのそばで、別のスタッフ4人が、イベントコンパニオンのように「皆さん、どんどん質問してください」と見学者に呼びかけていた。

関西文化学術研究都市の「大川センター」（京都府精華町）で昨年12月に開かれた「子どもたちが企画運営する子どもたちのためのワークショップ（参加型体験学習）」。そのスタッフ9人は、全員が小学生だ。

「教え方で難しかったのは？」「小さい子にも、わかりやすく説明しなければならないところです」

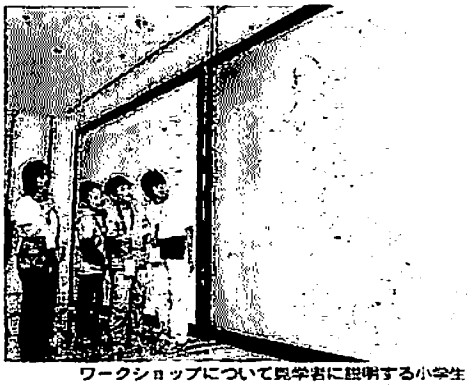
「学校の勉強と違う点は？」「学校では意見を出しても批判されるのではないかと不安を感じていましたが、ここでは感じなかった」

こうした見学者とのやりとりや、ロボットの動かし方を小学生に教えることも、説明する力を付ける体験学習になる。

＊

スタッフは、近畿地方の3府県から応募した小学4～6年生。約一か月前から休日に集まって、役割分担を決め、進行表を作成、説明の文言も考えた。

その一人、東嶋璃紗さん（12）（奈良県田原本町立南小学校6年）は、これまで学校の授業で



ワークショップについて見学者に説明する小学生（昨年12月、京都府精華町の大川センターで）

は「恥ずかしい」と発言することもほとんどなかったというが、「みんなで案を出し合って頑張ったので、絶対成功させたいと思った」。

実は、見学者への説明のための台本は短すぎ、本番では時間が余ってしまったが、東嶋さんらは、大勢の大人を前に堂々と言葉をつないだ。

「NPO学習環境デザイン工房」（東京）のメンバーで、子供たちの企画を支援した大学院生の高尾美沙子さん（23）は「自主性にびっくりした。助言したのはほんの少し」と打ち明けた。

＊

大川センターは、米国マサチューセッツ工科大学と連携し、子供たちに様々な表現やコミュニケーションの体験をさせる研究教育施設。IT企業グループ「CSK」の創業者、大川功氏の考えで作られた。

今回の催しは、センターをベースに、子供向けのワークショップの普及・研究をするプロジェクト「ラーニングアート」の旗揚げイベントとして行われ、全国から約300人が参加した。

発起人代表の三田信行・同志社女子大教授（56）（教育工学）は、「子供たちが自分の言葉で語れるようになった。コミュニケーション力をつけるには、どうしたらよいか考えてきたが、その答えがワークショップにあった」と語る。

「自分たちが楽しいと感じるものを誰かに伝えたくなった」「何を伝えたいかが一番大切だと思った」

子供たちの声は、上田さんらの手応えを裏付けているようだった。

（関口和哉）

ラーニングアート　「学び（ラーニング）は芸術（アート）だ」という考え方に立ち、ワークショップという手法を使って、自らの意思で学ぶ活動を指す。この考え方で大学の研究者やNPOメンバーらが取り組むプロジェクト名にもなっている。今年も、東京や金沢などでワークショップやシンポジウムの開催予定がある。

ご意見をお寄せください。〒100-8055（住所不要）読売新聞東京本社教育企画取材班。
ファクスは03-3217-9908。電子メールはkyoulkt@yomiuri.com